

レバノン・アメリカン大学アラブ世界女性研究所

たか はし り え
高 橋 理 枝

はじめに
歴史と組織
主な事業
おわりに

歴史と組織

はじめに

西バイルートのハムラー地区は、バイルート市内の繁華街のひとつでホテルも多く観光客が集まる一方、主要書店が軒を連ねる地区でもある。このハムラー地区を囲むようにバイルート・アメリカン大学とレバノン・アメリカン大学が位置している。昨夏のレバノン・イスラエル戦争の記憶も新しいところだが、3年ぶりに訪れたこの界限には戦争の傷跡はほとんどうかがえなかった。

レバノン・アメリカン大学アラブ世界女性研究所 (Lebanese American University, The Institute for Women's Studies in the Arab World/ Ma'had al-Dirasat al-Nisa'iya fi al-'Alam al-'Arabi: 以下、IWSAW) は、1973年に設立され、75年から続いた内戦下でも活動を続け現在に至っている、中東でも古い女性研究所のひとつである。筆者は、バイルート出張でこの研究所を訪問する機会を得たので、ここに紹介したい。

IWSAWは、レバノン・アメリカン大学の一研究所として、そのバイルート・キャンパス内に位置する。レバノン・アメリカン大学は1924年にAmerican Junior College for Womenとしてスタートし、中東の女子教育において先駆的役割を果たしてきた。1951年にはBeirut College for Womenと改称し、さらに73年には男子の入学も認め、名前もBeirut University Collegeと改めた。1994年にさらに名称を改め現在のLebanese American Universityとなった。1973年の大学の共学化と前後してIWSAWが設立されたが、IWSAWの設立に当たっては、レバノン・アメリカン大学がもともと女子校として出発したことを記憶に残すという意味合いが含まれていたという。

IWSAWのスタッフは、所長、プログラム担当者、定期刊行物編集者の他数名で、研究所としてはかなりこじんまりした組織である。所長はレバノン・アメリカン大学の教官で、初代所長ジュリンダー・アブー・ナスル (Julinda Abu Nasr) 博士に続き、モナー・ハラフ (Muna Khalaf) 博士が第2代所長を務め、現在の第3代所長はコミュニケーション論を専門とするディ

マー・ダッバス・センセニジュ(Dīma Dabbas Sinsinij)博士が務める。スタッフ数の少なさからも推測されるように、独自に研究員を抱えて調査研究活動を実施するのではなく、その都度、国内外の関連省庁や国際機関と協力し、関連するテーマを専門とする外部の研究者と契約を結んで、調査プロジェクトやプログラムを組織・運営する形をとっている。活動資金は、大学の予算に加えて、調査プロジェクトや開発プログラム毎に国際機関などから提供を受けている。

主な事業

IWSAWの活動は、教育・調査・出版という学術活動と、女性に対するトレーニングや開発プログラムの実施の2つに大きく分けることが出来る。レバノン女性に限らず、名前のようにアラブ世界の女性全体を対象としている。その活動は、IWSAWの活動目的である(1)アラブ世界の女性に関するデータを収集し情報提供を行うこと、(2)アラブ世界の女性の権利に関する政策変更のための触媒として機能すること、(3)開発プログラムや教育を通じたアラブ女性のエンパワーメント、(4)レバノン・アメリカン大学のカリキュラムにおける女性研究の統合と発展、(5)アラブ女性に関心をもつ個人や組織の間のネットワーク化の促進、に沿って行われている。

1. 教育・調査・出版活動

レバノン・アメリカン大学に属する研究所として、IWSAWは女性研究に関する講義を受けもっている。講義は全学部 of 学生を対象としているが、特に人文学部、社会科学部の学生の受講が多い。残念ながらレバノン・アメリカン大学では女性研究で学位を取得できないため、こ

れらの講義は副専攻として位置づけられる。各講義には25人程度の学生が出席している。最近の講義内容としては、ジェンダー研究入門やフェミニスト理論、女性に関する心理学、芸術やメディアにおける女性の表象、経済活動における女性、アラブ女性に関する社会学的研究などがあげられる。講義自体は学内教官が担当するものもあり、IWSAWは講義の組織化を主な任務としている。

IWSAWの調査活動は、女性と環境、女性と教育、文学における女性、女性と経済発展、マネージメントにおける女性、メディアにおける女性、歴史のなかの女性、女性と政治などの分野で行われている。2002年にはアンマンにある国連女性開発基金(UNIFEM)アラブ地域事務所と共同研究を行い、その成果を「Evaluating the Status of Lebanese Women in the Light of the Beijing Platform for Action」としてまとめた。また調査活動に加えて、会議やセミナー、ワークショップも開催している。例えば2005年にはFriedrich Ebert Stiftungとの協力の下、「民主主義とジェンダー：政治、メディア及び教育における女性の役割」を開催した。また「国籍キャンペーン：私の国籍は私と私の家族の権利である」(多くのアラブ諸国同様、レバノンでもレバノン国籍の女性が他国籍の男性と結婚した場合、夫や子供はレバノン国籍を取得できない)では、後援団体のひとつとなり、署名活動や弁護士等を招いたパネル・ディスカッションを開催した。

IWSAWの出版物の核をなすのは、1976年に発行を開始した雑誌「*Al-Raida*」(英語誌、al-Ra'idaはアラビア語で「バイオニア女性」の意)である。これは季刊で現在112号まで発行されている。毎号特集テーマが設定されており、過去

のテーマとしては「現実と幻想の間の女性」(1978, No.5), 「女性とメディア, 平和, 性的搾取」(1980, No.13), 「なぜ女性解放運動か?」(1981, No.18), 「レバノンにおける女性と戦争」(1984, No.30), 「未婚女性」(1990, No.53), 「アラブ女性と貧困」(1997, No.77), 「アラブ世界の婚姻パターン」(2001, No.93/94), 「セクシュアリティとアラブ女性」(2002/2003, No.99), 「アラブ世界の非アラブ女性」(2003, No.101/102) などがある。これらのテーマは, レバノン・アメリカン大学の教官だけでなく他大学の研究者, ジャーナリストなどから成る「*Al-Raida*」の編集委員会を経て決められている。また「*Al-Raida*」の国際顧問委員としてはILOやUNICEFのスタッフが含まれている。著者はレバノン国内に留まらず, 広くアラブ女性研究者が参加しており, 例えばヴァレンティン・モガッドム (Valentine M. Moghadam, やナフラ・アブドゥー (Nahla Abdo), ロウズマリー・サーイグ (Rosemary Sayigh) らの名前をみることができる。70ページ前後ということもあって情報量としてはそれほど多くはないが, 書評コーナーなどもあり, 現在のアラブ女性に関する研究動向や議論, 各分野における基本情報の収集には便利である。例えば「アラブ女性運動」(2003, No.100記念号) では, アラブ女性運動に関する論文, 著名な研究者からのコメントに加えて, 法制度や女性の政治的権利, ジェンダー・モニタリング制度等の項目に関するアラブ各国の簡単なプロフィールが掲載されている。また「アラブ世界の女性研究センター」(2000, No.90/91) では, アラブ世界の女性研究の動向や各国の女性研究センターが紹介されている。

その他の出版物としては, レバノンの法律に

おける女性の権利について分析した「レバノン立法における女性」(アラビア語)(1985)や, 1982年のベイルート市及び周辺の工場での調査結果をまとめた「Tasks of Women in Industry」(1982), また「Women, Media, and Sustainable Development」(1996)等が挙げられる。1998年に出版された「レバノンにおける女性労働力」(本文アラビア語)は, Agency for International Developmentからの資金提供を受けて実施された調査の成果で, レバノンの女性労働に関する詳細なStatistical Appendixがつけられており, 貴重である。また視覚資料としては, 19世紀から内戦が始まる1975年までの女性運動家に焦点を当てたレバノン女性運動に関するドキュメンタリーを作成している。

こうした出版活動に加えてIWSAWは設立以来, 女性に関する情報収集と蓄積を目的のひとつとしてきた。その活動の成果は, 昨年新しい建物が完成したレバノン・アメリカン大学図書館内に, 女性に関するコレクションとしてまとめられている。レバノン・アメリカン大学図書館は部外者でも出入りは自由で, 開架式の書架のすぐそばに閲覧机も多数用意されており, 居心地よく使うことができる。

2. トレーニング・開発プログラム

この研究所の特色としては, 学術的な活動のみを行うのではなく, 開発プログラムも実施している点あげられるだろう。この開発プログラムの背景には, 長期にわたる内戦によって多数の人々が故郷を追われ, 女性世帯主の増加, 貧困の女性化などが進んだことがある。こうした状況の改善に, 特に1985年から実施されたIncome Generating Activitiesは成果を挙げてきたという。このプログラムでは, 社会問題省

との協力のもと、国内各地でワークショップを開催し、これまで約3000人の女性に収入の道を開くためのトレーニングを行ってきた。

Basic Living Skills Programは、非識字あるいは読み書きが十分に出来ない女性を対象に開発されたアラビア語の教育キットを使いながら行われるトレーニングで、アラブ女性や家族の生活向上のための能力強化及び意識向上、開発過程への参加を通じたアラブ女性のエンパワーメントを目的としている。この教育キットは、NGOや国際機関等でコミュニティ開発に関わるソーシャル・ワーカーによって主に使用されている。このキットのなかには、アラブ各国の女性のライフ・ストーリーに基づいたツールが含まれている。これまでのプログラムの実施を通して得られた情報に基づき、2005年にEmpowering Arab Women Through Literacyとしてこれらのライフ・ストーリーが再組織化され、新しいキットが作成された。このライフ・ストーリーは、保健、環境、リプロダクティブ・ヘルス、栄養、社会教育、女性のエンパワーメント、労働機会の創出を通じた女性のエンパワーメント、身体的精神的障害を抱えた女性、慢性病、青少年期、女性に対する暴力、法律（レバノン法に限る）の12分野をカバーしている。

最近開始されたプログラムとしては、女性囚人を対象としたRehabilitation and Vocational Training Program for Women in Lebanese Prisonsがある。このプログラムは1997年に予備調査を行い、2001年から開始された。レバノンには4つの牢獄が存在するが、これらに投獄されている女性囚人に対して社会復帰のための職業訓練や保健サービスや法律に関する情報を

提供するとともに、セラピストの派遣などを行っている。

3. 特別イベント

IWSAWでは、2000年から年1回フィルム・フェスティバルを開催している。これは映像を通じた女性のイメージが、ベリーダンサー等に一面化され歪められているのを改善し、同時に女性映像作成者の活動を促進することを目的としている。フェスティバルでは毎年テーマが定められており、各国の女性映像作成者による映画やドキュメンタリーが上映されてきた。ちなみにこれまでのテーマは、ON/By Women (2000)、Images of Women (2001)、Women's Diaries (2002)、Profiles (2003)、Cinema/Women /Sexuality (2004)、Veils (2005)である。アラブ世界のみならずイランやパキスタン、南アフリカなども含め、女性が直面する様々な問題を取り上げている。集客力はテーマや監督の有名度によって異なり、ドキュメンタリーよりもストーリー性のあるもの、特にイラン映画などに人気があるという。フィルム・フェスティバルは例年夏に開催されているが、2006年については戦争のため、延期せざるを得なかった。現在、開催に向けて活動はしているが時期は未定だという。次回のフィルム・フェスティバルでは少し方向性を変える予定で、特に若い学生らに女性やジェンダーに関わる問題を知ってもらうことを目的にプログラムを練っているということであった。

IWSAWの特別イベントとしては、他に3月8日の国際女性デーのイベントがある。これは1998年以降開催されているもので、写真展やコンサート、文化イベントを開催している。このイベントも毎年特定のテーマに沿って開催され

ており、過去のテーマとしては、レバノンの女性教育者としてパイオニア的存在であり IWSAW の雑誌「*Al-Raida*」の編集者でもあった「ローズ・グライイブ (Ruz Ghurayyib) の思い出」(2006)、「女性と戦争」(2004)、「ヴェール」(2005)等があげられる。これらのイベントの成果は出版物としてもまとめられており、特に2005年のヴェールに関連して出版された「*Veil(s): A Photographic Overview*」は、様々な時代・宗教・地域の女性のヴェールの様子を収めた写真集である。日本ではヴェールというと一概にイランやサウジアラビアに代表される真っ黒な布が想像されてしまうが、ヴェールの多様な形態・機能・意味を垣間みることが出来る資料として興味深い。また2007年のイベントでは、戦時下で優れた報道を続ける女性レポーターの表彰が企画されている。

おわりに

最近のIWSAWの活動においては、フィルム・フェスティバルにみられるように、メディアと女性に大きな関心が寄せられているように思われる。これは現所長の専門がコミュニケーション論であることにも起因していると思われるが、フィルム・フェスティバルは前所長の時から実施されており、また「女性とメディア」といったテーマの論文は、近隣アラブ諸国でも目にすることがたびたびあった。むしろIWSAWにおいても、アラブ世界における女性研究の動向が反映されているように思われる。

アラブ世界では、特に1990年代以降、女性研究や調査を行う地元の団体が増加している。しかしレバノン女性に関する調査研究は層が薄く、

IWSAWの出版物はレバノン女性に関する貴重なデータを提供している。IWSAWの出版点数がそれほど多くないのが残念なところである。また重要な事業である教育、調査・研究、開発プログラムが密接に連携し、ジェンダー研究者の輩出と、地元の開発プログラムで収集した情報の調査・研究活動へのフィードバックがより充実すると、活動がより興味深いものとなるのではないかと思われる。

過去からの活動の継続というのは、財産のひとつである。IWSAWの雑誌「*Al-Raida*」では、例えば「女性と労働」のように繰り返し扱われるテーマもあり、それを追うことで大雑把な状況の変化を追うことも可能である。レバノンは1970年代以降、度重なる戦争によって大きな被害を受けてきたが、IWSAWの活動にみられるように、そうした状況下でも研究活動が継続されてきた。IWSAWの位置する地区では、確かに8月の戦争の傷跡はみられず、2つのアメリカン大学自体は攻撃の対象とはされなかった。しかし、大学職員のなかには自宅が被害を受けた人もおり、また戦争後も毎日数時間の停電が続いたという。余談にはなるが、戦争直後に大学図書館職員から受取ったメールにあった「(そうした状況にもかかわらず) 図書館を開き、なんとか日常の仕事の流れを維持できるよう努めている」という言葉が非常に印象的だった。こうした地道な努力が、戦争が繰り返される状況下での学術活動の継続を支えてきたに違いない。

残念なことに、今回の出張中の11月21日、工業相でキリスト教マロン派政党のひとつであるレバノン・カターイブ党幹部のピエール・ジュマイイル (Biya r al-Jumayyil) が暗殺され、レバノン政情は以前にも増して不安定化している。

葬儀のあった23日には、市内中心部にある殉教者広場で大集会が開かれ、広場は支持者で埋め尽くされた。市内各所にはチェックポイントが設けられ、そこそこに銃をもった兵士の姿がみられ、筆者ははじめて戦車を間近にみることになった。この日、大学は閉鎖され、政府機関や国際機関、ほとんどの商店は休業となり、通りにはいつもの賑わいはなかった。葬儀翌日の状況についてホテルのフロントで尋ねたところ「通常こうした場合、葬儀翌日も政府機関は休みとなる」らしい。こうした状況に不慣れな筆者などは、暗殺という異常事態に「通常」という形容詞がつく（今回で5件目、6人目の犠牲者）

ベイルートからさっさと逃げ出してしまいたくなるのだが、特に途上国研究を行うにあたっては、不安定な状況下で活動を継続していく“タフさ”においてもIWSAWに学べる点があるだろう。

[付記] 本稿の執筆に当たっては、IWSAWウェブサイト (<http://www.lau.edu.lb/centers-institutes/iwsaw/>)、LAUウェブサイト (<http://www.lau.edu.lb>)、IWSAW各種出版物、IWSAWスタッフとのインタビューから得た情報を参考にした。

（アジア経済研究所在ダマスカス海外派遣員）